

全体会コメンテーター：津富 宏さん 当日コメント内容（静岡県立大学国際関係学部教授／特定非営利活動法人青少年就労支援ネットワーク静岡 理事長／一般社団法人静岡学習支援ネットワーク 理事長）

【現場からの報告】

1.森田 真希さん（NPO 法人 地域の寄り合い所 また明日 代表理事）

「古くて新しい支え合いのカタチー「また明日」の取り組みと実践ー」

2.島山 由美さん（NPO 法人 だいじょうぶ 代表）

「子ども支援の現場から ～「ひだまり」の取り組み～」

3.鈴木 稜さん（NPO 法人 ビーンズふくしま 副理事長）

「子どもの貧困と向き合う 貧困家庭へのアウトリーチ実践報告 学習支援の向こう側を目指して」

【コメンテーターとして話したこと】

- ① この場の各報告の圧倒的な真実性／その一方で、「支援」が市場化されつつある中、「支援」の真実性をどう伝えるべきか、どう可能なのか／「社会的価値」による評価は、支援の成果の出にくい対象の切り捨てに安易につながりやすい／要は、「人権」に基づく支援にならない／日本の非営利組織の活動は民営化（新しい公共など）として進展したことを踏まえると、市場の中で素朴な「思い」をどう守り位置づけていくか。
- ② 支援活動のオーナーシップはどこにあるのかという議論は重要／民主的な意思決定と言うのはたやすいがどのように実現するのか／専門家、ボランティア、当事者は、支援のオーナーとして、相互に（重なりつつ）どう位置づけられるべきか。
- ③ 貧困に限定しないという態度はラベリングなどを踏まえればただししい／しかし、その一方で貧困はさまざまな社会問題の底流にあり、貧困を鍵としてつながれる問題意識は、学習支援や生活支援を超えて、さまざまにある／たとえば、性的搾取、非行、歯科衛生、メンタルヘルス・・・／貧困に限定しないという観点が成り立つと同時に、貧困こそプラットフォームであるという観点も成り立つ／とすると、この子どもの貧困に関するネットワークが一体何をなすうのか。
- ④ そもそも支援者は何をつくりだしたいのか／困っている人々のニーズ表出機能が弱い限り、ニーズに応えるのではなく、ライツに応えるべきである（これは、①と関連）／また、ライツとみなすことで、当事者は主体化する／また、ライツ（人権）であるからこそ連帯の基礎ができる／しかし、そう言いつつ、ライツの押し付けもまた不健全／とすると、（普遍的であるはずの）ライツに基づくことで連帯が可能になるとしても、そもそも私たちはどんな連帯、どんな地域、どんな社会を創りだしたいのか、これも今後の論点。

【その他思ったこと】

- ① 貧困を鍵とする支援において自尊心がカギとなるのなら、支援はアイデンティティ形成となるはず／とすると、居場所（というもの）はアイデンティティ形成の機能を持つはず／では、今日、強調されたような意味での居場所はどのようなアイデンティティを形成するのであろうか。
- ② こうした「支援」が制度化されるにあたっては、どのような制度化が最も良いのだろうか／中間支援、支援組織同士のネットワーク、再分配の受け取り方などがおそらく議論になる。
- ③ こうしたことすべてのことは、支援にあたっての理念・哲学・方法と関連する／そもそも（関係性を規定する）「支援」という概念自体が適切かどうかも含めてである／関係性こそがカギであれば当然であるが。